

Genji Mihara ISN.46-J-452-C1

Sept. 3rd/1942

Lordsburg Internment Camp, N.M.

数知れぬ	天体牙元	只一	傾き忘る	星を見たり
つらめし	想ひし書か	手紙封が	こめく命	悲しみたり
仄かき	負愛の念を	春の辰	胸の月は	暮はして哉
素の胞に	抱かすこと	静けさ	一瞬に	起すのうら
砂漠に	朝土夕土の	雲の色	眺めて今も	同夢をうり
健やか	不自在し	寂り	會得ぬ復は	悲しむも
哀れみ	若拙の情思	消え去る	儂しき妻の	玉三草の可め
見しこと	古の人々	市長室	囚らば園	夕日傾く
掛石園	懐かぬ白	襦に	この悲し	胞に湧く不
恋しに	堪え難き時	泣き事	空を翳し	雲を見詰る
果はす	嘸野をひら	吹く空に	我が秘事	減らしてはみ
二週り	持た他はけ	音信に	手紙と端書	小包は着く
いまい	鳴らけにし	鳴ら聲	聞て眠ら	妻やふいと
こ生活	假寝乃夢	見ると口	古は他	今も此頃
北の方	聞え来り	物売り	吾が永遠	朝日さけ不
曉に	枕を眠す	星一	君を思ひ	吾は眠ら
夏来れば	海に山	望し	去年を憶	一夜更けけ
我を思ひ	嘸野の風	うたせ	君に定ま	街は不
むさし	心にか	憂え支	吾が事新	清く身来
明鳥	横切りゆく	大キス野	北ゆへ便	言傳は
君不手紙	待ちわ	野は中	虫の音	朝はらけ
陽炎乃	三つ目にけ	まきり	若くは	玉三草
明け暮れ	文行は他	學日	ふは	物に

妻の顔 ふと洗濯、手を休め  
 洗濯の盤に 写す 妻の顔  
 洗濯 下、度妻の有難さ  
 宝玉を 妻の土産、石拾  
 天宮 人の見お石 地から掘  
 壁に入り 冥宮土産、寶石  
 折紙 こゝろ喜々 思い出  
 石依 い泊らげたり 土産石  
 夏帽子 妻の好みも 求めり  
 夏帽子 振、別れを 惜みけり  
 春の宵 妻の持物や 虫の鳴く  
 妻の夢 縁之、見、春の音  
 春の宵 離れ見、妻思ふ  
 二人 徹折りし 志望君  
 昨日 妻の料理の 不慮  
 徹夜 今宵、寂し 妻と我  
 ゆく春に 君と別れ、君と我  
 行く春と 共、妻子、言返り  
 雷の西に 聞こえ、里恋し  
 持物 大根程 蒨の終り  
 花 花、名札を 立てたり  
 花 花を、見ると 君が女  
 金 智恵、懐揃へ 南夜  
 摘菜 妻の笑顔 雲に見  
 春曉 明星一、バツリと

因らる 家裏に、 言返りの  
 知らせ侍の身、 春思ひなく  
 逢ひ見、 涙草心、 更大哉  
 舞に、 妻の悩みに  
 舞、 寂し、 友は嬉し、 おしかし  
 心、 荷籠め、  
 家思、 雪降、 夜、 位し、  
 軒、 空、 窓、 越し、 見、  
 モリ、 春、 春、 雪、 解、  
 因らる、 ぬる、 行、  
 是、 西、 東、 障子、  
 夢、 妻、 子、 顔、  
 たら、 別、 今、  
 雨、 日、  
 投、 芽、  
 春、 女、  
 因らる、 徒、  
 日向、 石、  
 峰、 遠、  
 山、 明、  
 辛、 越、  
 ゆく、 旅、  
 気、 清、

DETAINED ALIEN  
 ENEMY MAIL  
 EXAMINED  
 242  
 BY U.S.I. & N.S.